The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	設計基本方針樹立に至る一手順
Author(s)	徳岡, 昌克
Citation	デザイン理論. 1982, 21, p. 43-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

設計基本方針樹立に至る一手順

株式会社竹中工務店　大阪本店設計部
副部長(設計・意匠担当)　徳　岡　昌　克

一般に建築家の書く文章は難解であるとされている。特に，建築家がその作品について，設計趣旨を，述べるとき，その文章と作品より受ける印象との相違に，とまどうことがある。それは，恐らく，文章による表現か，そのヴィジュアルデザインのどちらかに，問題があるのではないかと思う。(本稿では，その両方に問題のある場合，つまり，その課題に，ふさわしくないであろう，建築家のヴィジュアルデザインと，その設計趣旨に，ついてはふれない。)

建築家については，その作品がすべてであるから，あえて文章で，その作品について語らないことが，賢明のように思える。又書かざるを得ない場合にもその作品の完成を待って，且つ世評も受け入れて，判断をするという手もないではない。しかしながら建築家が，自己発現の場，つまり仕事を手に入れるということは，容易なことではない。

とりわけ昨今のように，ＰＲ優先の時代には，なおさらで，建築家はあらゆる自己表現の手段をもって，ＰＲにつとめることになる。良いものは，いつか誰かが発見し，世に出してくれるのを静かに待つわけにはいかないのである。したがって折にふれ，作品について，文章をもって補足することになる。ここでとりあげる，設計基本方針書というのは，その構想が，建築物として世に問われる以前に関係者間に了解又は賛同を得て，次の作業に移る前提事項として

作製するものであって，前述の結果としての作品を文章をもって補足するのとは，趣きを異にするものである。我々の組織において，設計基本方針書の作成が，設計記録に関する取扱要領の諸表の一つとして，義務づけられたのは，昭和53年３月１日からではあるが，勿論これは正式に一つのフォーマットとして示されたのであって，この種の試みは，個別ではあるが，以前から組織の設計担当者が夫々に，設計過程の中にあって自己のデザイン主張に対する部内外の共感を得る手段の一つとして試行していた。

現在の「設計基本方針書」記入項目には，次の大要のもとに方向づけされている。

即ち，設計基本方針の設定は，建築主要望事項と，そのプロジェクトに関する客観的な条件（調査事項）とに対する建築技術的な解答を設定することであり，設計の過程において，その理念を一定の方法で秩序づけることは，そのプロジェクトの内容の意図を明らかにし，詳細設計の基礎となるものである。設計基本方針書は，関係部署間の意志の疎通を図り，共通の理念の寄りどころとなる。又デザイン会議，設計審査，見積依頼時及び着工前打合会議の資料ともなり，決定した基本設計のチェックにも使用することができる。

記入項目は

1）	地域的考察	7）	構造計画
2）	配置計画	8）	設備計画
3）	空間機能計画	9）	生産設計
4）	空間表現計画	10）	予算計画
5）	インテリア計画	11）	その他
6）	部位別構成計画		

となっている。

又，各記入項目の要点については，次のように解説，着眼点が示唆されている。

1）地域的考察

1-1 都市及び地域の特性

都市又は地域の機能的性格、伝統，人口，産業，交通の現況及び将来の動向に対する考察

1-2 適用法規

都市計画法，建築基準法，条例，消防法等

2）配置計画

2-1 ブロック計画

ブロックの機能的システム，規模，高さ関係，マスとしての表現，形態

2-2 外部動線

機能別進入路（車，来客，従業員，資材，etc，夜間，非常時），建築的処理，出入管理のあり方，アプローチに伴う推移効果，駐車計画

2-3 自然との関連

敷地及びその周辺の地形，景観，風土，方位，気候，その他自然的条件との関連

2-4 造園又は外部構成計画

目的，性格，施設，都市的意義，建築的処理，屋上利用

2-5 周辺建物との関連

規模，用途，外部動線，その他機能関連，日照，通風，騒音，その他物理環境的関連，プライバシー，圧迫感その他心理的影響，形態的調和

2-6 増築計画

予想年度，フレキシビリティ，増築前の又は増築後の調和，施工性の考慮

以上のように，3)空間機能計画，以下についても，示唆されているが，本稿では，省略する。

冒頭に述べた文章とヴィジュアル・デザインの一致の難しさにも増して，こ

の設計基本方針書の作成についても，的を得た表現をつづるのも，仲々至難の技といえる。

そこで，基本方針書作成の理念，或は骨子，或は的となるべき当該プロジェクトの性格の把え方について，言及してみたい。

日常の業務で処理するプロジェクトについては，初期の段階では，建築主の要望や，具体的な設計条件が不揃いの場合が多く，又設計作業には，建築主や関係者とのやりとりのうちに，煮詰められる要素も多いので，ここでは，設計競技の２プロジェクトを例にあげたい。次の２例は，いずれも，全国公開コンペのもので，沖縄市民会館は，Ｓ52年，荻須記念館は，Ｓ56年に応募し，我々の提案が，最優秀作品として採用，前者は，56年１月に竣工，後者は，58年８月開館を期して，施工中のものである。

この２プロジェクトを進め，設計基本方針を樹立するに至る最重要な共通のステップは，先づ情報，資料，調査の完備である。

これらは

１）当該地について，その歴史的特性，民族的特性，地理的特性

２）当該建築物について，その既存施設分析，原論，機能展開

３）当該人物について

作風と心情，専門家としての活動，当該地との関係

であるが，これらはいわば現状の把握とも言えよう。次にはコンペ要項の中からKey words（手がかりとなる言葉）を探し，問題点の抽出につなぐ，即ち，

１）当該地における「文化発展」はどうあるべきか？—市民共通の概念の注入

２）当該建物は，現代ではどうあるべきか？—人と人との共通の場

３）当該人物の当該地に果す役割はどうあるべきか？—心の絆と文化の触発

問題点の抽出の後は，これらに対す答えとしてプロジェクトを性格づける。

例えば，荻須記念館にあっては，ART SANCTUARY の提案であり，又，

沖縄市民会館にあっては，市街地と海へ開かれた唯一の見通し線の発見によって，その眺望を市民志向の高揚手段と捉えた広場の提案であった。（注，荻須記念館は当面第一期工事としての仮称稲沢市美術博物館であり，提案の他施設は，今の処明確な完成の予定はない。　又，沖縄市民会館は，前面道路の市街地への連絡及び公園が整備されるまでには至っていない。したがって提案のねらいが実現するまでには，まだ時間を要するものと思われる。）

さて，調査及資料の項目を羅列してみると，

資料：全般的には，歴史，伝統，気候風土，植物，人口，経済，特殊事情等
技術的には，都市計画，交通体系，類似建物，地方の建築，地方の基準，（当社）保有技術，関連法規

調査項目としては，

環境：地勢風土，人口，市民感情，植物，特殊事情

敷地：地勢風土，交通機関，交通路線，都市設備，特殊事情

建築：史跡，新古建築，類似建物

等で特に設計者達自らの現地調査で，提案の性格付けや造形的ヒントを得た。即ち，荻須記念館については，そのおびただしい数の神明社と，その相互関連性の発見であり，沖縄市民会館にあっては，城跡，玉陵，民家，等に見られる格調ある造形美と民家のアプローチに見られるひんぷん，等からである。なお稲沢市における，神明社にあっても，不浄除と称せられる見隠しがあり，両地方の相互の関連性において，今なお，興味が尽きない。

以上，設計方針書作成に至る検討すべき一手順を述べて来たが，建築設計の出来，不出来が，その課題に対する性格の設定で，左右されると断言出来るほどで，いかにも，的を得た性格設定が，難しいが故に，設計に当っては，常に関心深く，その持つべき特徴を見つけることに努めている。又，その基本方針によって，完成された作品が，どのような社会評価を受けるかを，設計の質を計り，向上させる尺度の一つとしても活用したいと，考えている。

なお，設計競技を成功に導くために揃えるべき条件としては，

1．コンペ情報入手と対応　　2．情報資料調査の完備

3．構成メンバーの適性配置　　4．手持プロジェクト配分処理

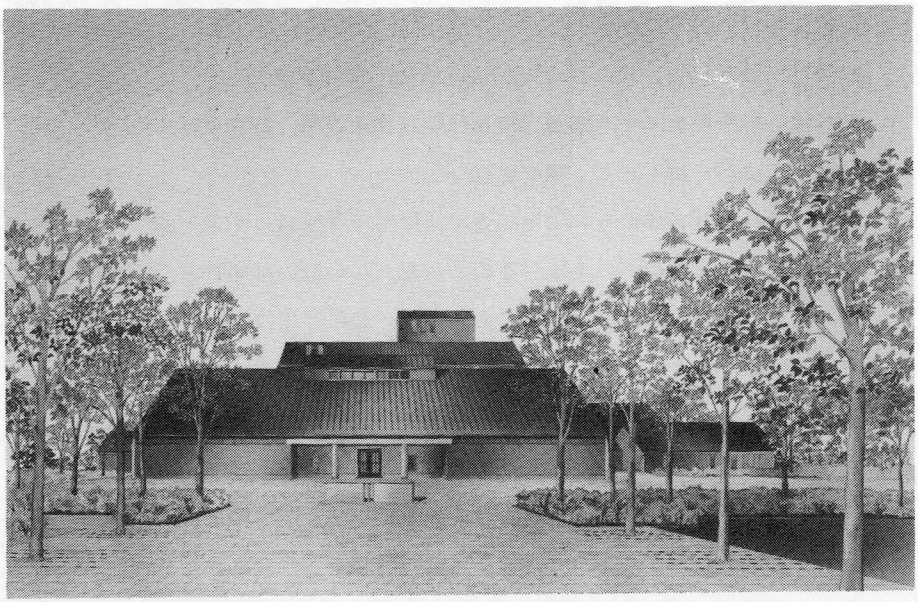
5．保有技術活用　　6．方向付け適切な判断

7．設計思想と造型力の合致等である。

しかし，又，より創造的な提案について，どのようにアプローチをすべきか，自問している。

次に2プロジェクトについて夫々の設計基本方針と審査評がいかに関係深いかを具体例として紹介したい。

事例Ⅰ　荻須記念館



●提案の基本理念

〔背景〕稲沢文化の歴史

弥生時代にこの地方の稲作が始められて以来，大化改新ののち，尾張国司が置かれた時に，この地方の歴史の始まりを見ることができる。また，この地方

の自然を支配してきた木曽川とその枝川の氾濫による洪水もまたその歴史であった。人々はわずかばかりの自然堤防と，自然堤防状微高地に安住の地を求め，自然を崇拝しつつも，心の依りどころとして集落ごとに神明社などの村社を建てまつり，育くんできた。

〔目的〕稲沢独自の文化的発展

近世になって，交通の要所として稲葉宿が栄えたが，明治以来土地利用度の低い後背湿地が埋め立てられ，工場進出の波を受け，現在に至っては，名古屋市の都市圏拡大による都市化という名の洪水を受けはじめており，将来的には，稲沢独自の文化的発展が切に望まれる。

〔方策〕文化創造の場創り

優れた伝統的文化と，市出身の国際的画家である，荻須高徳氏の記念性とを統括的にシンボライズして捉え，人々が郷土の歴史的遺産と画伯の芸術の世界に接することによって，稲沢の明日を考え，市の輝かしい文化の発展に寄与できる場創りが必要である。

〔提案〕ART SANCTUARY

荻須記念館，博物館，歴史民俗資料館収蔵庫が1つの敷地に集積される事によるアクティビティの相乗効果は充分期待できるが，その上に，市民のコミュニティ醸成の為の要素として，下記の3つの機能を注入することにより，3館

1．シティーパーク　●市民の生活環境としての緑豊かな町づくりの拠点
2．シティロビー　●市民の対話による文化高揚の場
3．シティステージ　●市民の生活の「はれ」の場

の内外は共に有機的に融合され，市民共有の活性化された空間となる。

かっておびただしい数の神明社が村人の守護神であったように，現代の稲沢文化のシンボルとして，計画地の環境を包含したこれらの建築群のアンサンブルを，文化の香り高い「芸術の聖域」として提案する。

●設計基本方針

〔環境計画〕

市内に点在する村社の鎮守の森と，三宅川，大江川の２つの水系に注目し，水と緑の回廊が全市に設定されることを望みながら，シティパークの拠点として，計画地全体を森として構成し，稲沢の植生から選ばれた「イナザワグリーン」と荻須画伯が好んで描いた「オギスグリーン」を注意深く配置することで環境を構成した。

〔建築計画〕

配置計画

荻須記念館の位置づけ：西と南に視界が開け，遠くは養老山脈，近くは画伯の生家が望める計画地にあって，北側からのメーンアプローチに対し，記念館を正面に，博物館を南側に記念館をとり囲むように配置し，訪ずれる人々が，全体位置関係を把握しやすいようにするとともに，芸術の聖域に来場する精神的高揚を促すべくこの地方の神明社に見られる「不浄除」を設けた。

軸線の設定：古くは条里制の跡に見られる稲沢の都市軸（東西と南北）に整合させる為，３館共，棟軸方向を東西にとった。

外部空間の構成：地域のランドスケープになじませ外部空間にヒューマンなスケール感を与える為に，やわらかさと，静謐性をもつ銅板瓦棒葺の勾配屋根とし，外壁は稲沢地方の土の質感を求めて，美濃の土で焼き上げた縄文様のタイル張りとした。また，稲沢地方の町家の広縁が，ほど良いコミュニケーションの空間であることに注目し，記念館と博物館の間に，彫刻の広場を配置した。

人と車，サービスの動線：どの方向からアプローチしても緑豊かな環境に包まれ建築群のアンサンブルが望めるよう配慮すると共に，大きな駐車場を小さく見せるため，主に保健センター利用者が使うゾーンを分離し動線の交差を避けた。また来館者用駐車場東側にはアプローチを兼ねたエプロンを配し乗降の容易さを考慮した，一方敷地東端には，防災道路を兼ねた南北貫通のサービス

道路を設け3館の各々の搬入口に直接アプローチできるようにした。

表現計画

格調高く端整で堅牢であることを基本とした。

かたち　切妻勾配屋根の採用　●比較的雨の多い地方である。　●地域のランドスケープになじませる。　●スカイラインが美しい。

材　料　●屋根は荻須画伯の住むパリの街並の伝統的美しさを彷彿させ又，外部空間に静謐感をかもし出す銅板瓦棒葺　●外壁は稲沢地方の土の質感を求めて，美濃の土で焼き上げた縄文様の炻器質タイル張

個別建物計画　荻須記念館

特に意図したオリエンテーションホールは各々の展示室への導入部にあり，上部の光ダクトで取込まれた外光を受けたオニックスの柔らかい光は，床の深々としたカーペットに吸収されて，芸術に今対面しようとする来訪者の精神的高揚に準備できる空間とし，又，学校等の団体，グループの調整前室としても機能させる為特に意を尽した。

平面計画はシンメトリーとし，オリエンテーションホールを介して西に荻須高徳常設展示室，東に一般展示室，南に交流展示室，ロビーを配置した。

博物館

一般来館者が利用する展示部門・教育普及部門・コミュニケーションサービス部門をすべて1階に配置し，利便性と安全性を考慮した。

エントランスコリドールは，この博物館の根幹をなす空間であり，すべてのゾーンに対する緩衝地帯とし，館内のわかり易さを考慮した。

中展示室と記念館の一般展示室の同時利用，中展示室の博物館展示ロビー側の扉を閉じることにより可能となる。また記念館との連絡通路は，彫刻の広場と一体感をもたせるために大きな開口部を設け解放的な空間とした。

芸術品の搬入ルートと文化財収載庫及び博物館収蔵庫との関係が有機的位置関係となるように考慮するために文化財収蔵庫との連絡通路を荷受場とした。

調査研究部門は見晴らしの良い3階に設け独立した研究活動ができるように考慮した。

〔設備計画〕

展観者，展示物，収蔵物が安全を確保され，かつ望ましい環境のもとにおかれるための効率のよい設備システムを採用した。

〔構造計画〕

稲沢地域の自然条件および空間上の特徴を考慮し，安全で経済性に優れた構造方式を採用した。

〔展示計画〕

展示品を安定した光環境の中で美しく見せる為，人工照明を採用した。

記念館，博物館，文化財収蔵庫の収蔵物を現代の生きた情報とする為に，オーディオ・ヴイジュアルシステムを導入する。

●審査報告　日経アーキテクチャー1982.6.7号

荻須記念館設計競技第二次審査講評

審査委員　佐久間達二

▶徳岡案（作品記号A）

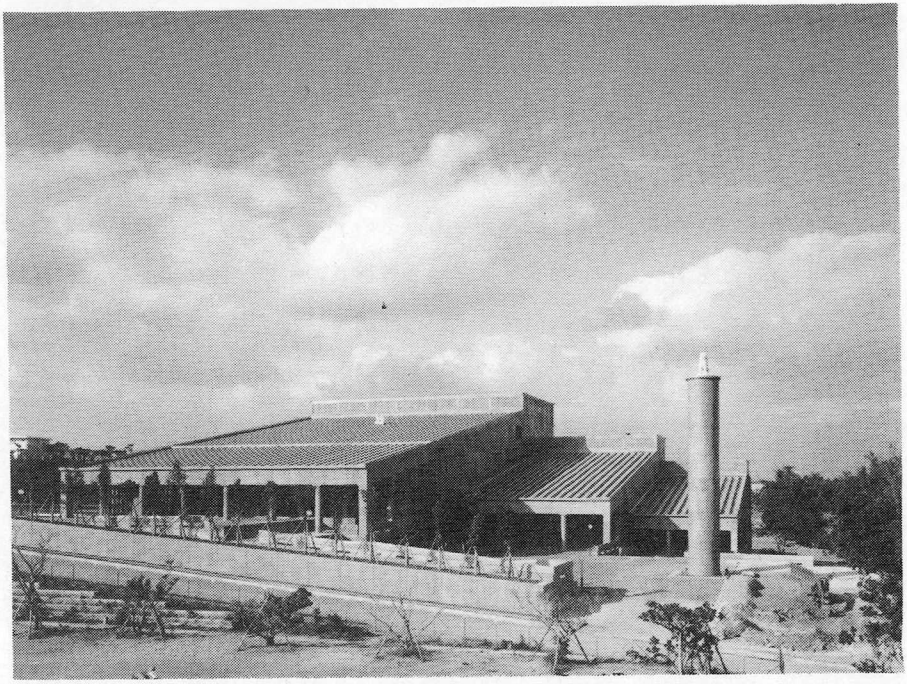
一次のときの設計条件と基本的な変更となった“北側からの導入”という新しい事態に直面して，どのブロックプランを見ても戸惑いのあとが見られた。その中でこの案は独りその変化を超えて，一次の案より更に説得力に富んだ内容のある作品となって，審査員全員の共感を呼んだ。

当然のことながら，要求されている諸条件に対する周到な分析，作者の体験から生まれる平面計画の読みの深さ，緑をテーマとした緻密な環境計画に到るまでのプレゼンテーションの優秀さと同時に，今なおパリに留って元気に創作活動を続けておられる荻須さんと，地元稲沢の人たちとの間の心のきずなといった目に見えない精神性を特に大切にしている点に心ひかれた。“ART SAN

CTUARY" というサブテーマにこめられた気持はやはりその辺りからきているように思われる。それがこの案のデザインにも一貫している。これが真にこの地域の伝統の中に根をおろさせるための施設として地元に迎え入れられるためには，この案にもなお改良の余地少しとしない。形のシンメトリー性をあえて保つための面積配分の調整，内部空間の完備のため失われた開放性，外形から決められたのか博物館南西の軒の高さ，前面のアプローチ庭の夏季の照り返し等，改良点は散見されるが，いずれも今後，実施設計の段階で検討可能な程度である。

よってこの案を他に得難い作品として審査委員全員で“最優秀作品”に推すこととする。審査委員，井関弘太郎，飯田喜四郎，内井昭蔵，佐久間達二，中村洋，水野柳太郎，大谷喜三郎，橋本春夫，敬称略。

事例Ⅱ　沖縄市民会館



基本理念

沖縄と聞くと，遠い昔の大阪で小学生だった頃のかわいい友だちらを想い出す。子供たちの小学校もまた，コザ小学校と姉妹校であった。

初めて沖縄を訪れたのは，万博の年の11月であった。大洋州と東南アジアの諸都市を訪れ，大阪へ戻る前日が，沖縄訪問のスケジュールとなっていた。

アルバイトだという女子学生のバスガイドから，切々たる沖縄の現状を聞いいた。目の前の都市景観からも，街のたたずまいから，かつての伝統とロマンの沖縄を感じとることはできなかった。こうした状況は，全国的にもいえることではあるし，大阪もその例外ではないが，メルボルンやシンガポール，そしてバリ島の美しい村落を観てきた直後だけに，沖縄の現状に強い印象を受けたのだった。

昭和52年４月６日，沖縄出張所から「沖縄市が，国際文化観光都市としてふさわしい文化の殿堂である市民会館を，公開競技にかける」というニュースの小さな切抜きが届いた。

ただちに組織をあげて，これに応募することを決意し，歴史と文化を求め，沖縄の風土を観察すべく，全島を踏査した。

古典舞踊の格調高い型や，民謡からも，そのディテールが，とりわけ洗練されていることを学び，コンクリートという無機質のものに，情感を持たせるよう，楽しみながらつくった。植栽は，いつ沖縄を訪れても，バイタリティのあるガジュマルや風格のあるフクギや，やさしいホウオウボクを配し，色あざやかなクロトンを植え込み，しきりに詩情をかき立てられる今帰仁城跡の，紫つゆ草を根じめとした。

沖縄市民会館は，その長い建設の希望と，多くの人びとの熱意や協力によって初めて実現した。シンボルツリーとして前庭に植えたガジュマルが，ますます気根を増やし，たくましく育って行くように，市民会館も市民の皆さんひとりひとりの力強いご参加を合わせて，その建設の理想が，いよいよ現実のもの

となって発展していくことを祈っている。

設計説明書

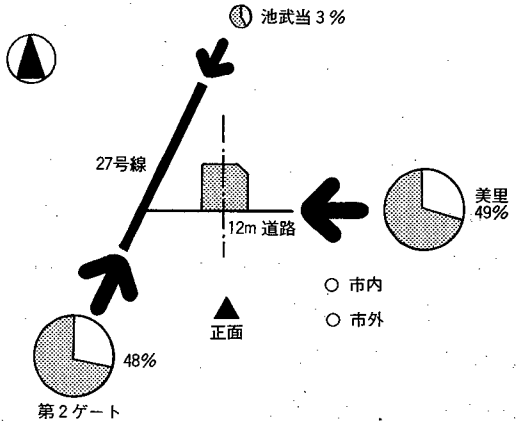
配置計画

●沖縄市民のレクリエーションの“ひろば”としての八重島公園。

●沖縄市民の文化交流の“ひろば”としての市民会館。

この二つの調和を図り，豊かな人間交流の場と教育文化創造の場をつくることとした。

アプロ々チ　県道27号線は幹線道路で歩行者専用道路の性格をもち，12m 都市計画道へ分流する。この12m 都市計画道路が敷地へ接する。沖縄市と周辺地域の人口分布から交通手段別に分析すると，1日当り平均来館者数は 1,330名，うち第2ゲート方面6637名48%，美里地域方面 653名49%，池武当方面40名3%である。



アプローチ分析図

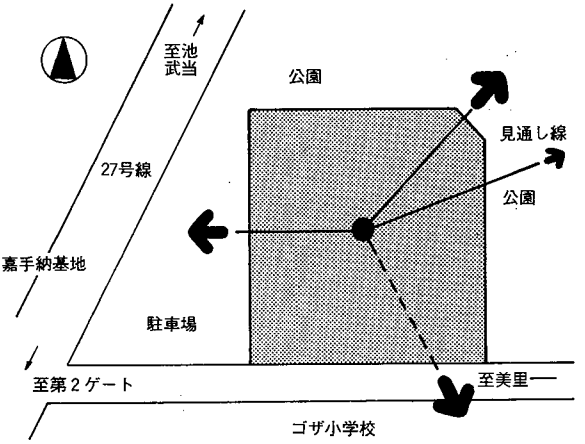
正面は利用者の多くの人が納得できるもので，判りやすく，親しみやすく，明るい面としたいため，メインアプローチは，12m 都市計画道路からの南入りとし，軸線は南北に設定した。

敷地環境　沖縄は健康で美しく，明るく住みよい，平和で豊かな国際文化観光都市を志向している。敷地の環境は，1.緑のふところに抱かれた公園，2.コザ小学校校庭側の明るい空間，3.幹線27号線と駐車場施設がある。

この中に，美里地域市街地と海へ開かれた眺望のある，唯一の見通し線があ

る。この眺望を市民志向の高揚手段と捉え，施設と公園の融和と，広場の拡がりをイメージした。

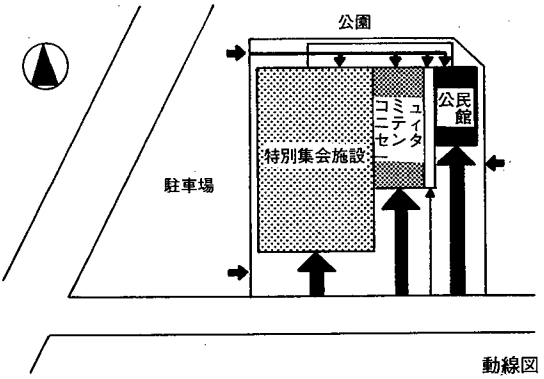
ブロック計画　ブロックプランは雁行並列型である。平面ブロックは市民会館施設の特別集会施設，コミュニティセンター，公民館の3ブロックを雁行に配列する。管理サービスブロックは公園とのクッション的役割をもたせた。



敷地環境図

断面ブロックは，大地のうねりに足をつけることを前提に，土地の起伏と道路勾配を有効に生かして雁行断面とした。広場は人と人とのふれあいの場で，平面，断面ブロックの雁行並列型で生じる変化を演出する。また防災避難と消化活動の拠点ともなる。この計画により，敷地条件と施設機能および目的の有機的結合と調和を可能なものとしている。

動線計画　1.主動線は12m都市計画道路から南入直進する。駐車場利用者は南西面取付部を通り，公園利用者は公民館前広場の階段から主動線へと合流する。2.身体障害者は，広場と同一レベルの大ホール，中ホール，公民館へ導入する。公民館内はエレベーターを利用する。3.管理サービス動線は正面と北西部の公園との共同利用駐車場とする。以上の3点を留意し，



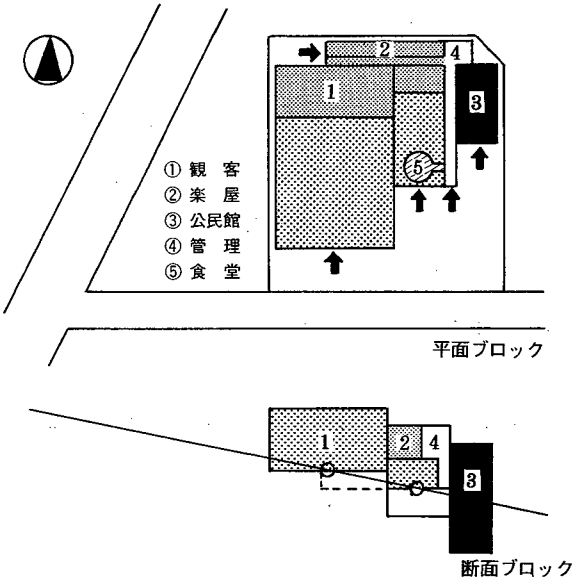
動線図

利用者と管理サービス機能を単純明快な動線で計画した。

建築計画

雁行並列構成　会館の管理区分は，特別集会施設，コミュニティセンター管理と公民館管理である。

会館の機能区分と計画は，1.観客：前面道路と広場に直結する。2.楽屋：機能によって生じる舞台高さを，雁行断面により同一レベルで直結する。3.公民館：明るい室内環境で公園との融和を図る。4.管理：各機能の接点にあり，管理サービスの省力化とスムースな動線を図る。以上のように，管理区分と機能区分は雁行並列構成により明快なものにしている。



日陰げ　南面各施設入口には深い庇を設け，また東西の開口部にはＰＣ板構造格子ルーバーを取り付けている。これは伝統的な凧の骨状のもので，サッシュ取付けの役割をもたせて強烈な日差しに対処してのものである。

遮音計画　航空機騒音対策として，外部設定騒音レベル89bBに対して，内部騒音レベル目標値NR30に設定し，屋根，コンクリートスラブの上にU型PC板葺き，二重構造屋根板として，壁も二重遮音壁，また開口部も二重サッシュとしている。この屋根は地域特有の瞬間降雨量にも対処したもので，沖縄の風土と環境にマッチした表情をかもし出している。

音響計画　大ホールは音楽を主体とした多目的ホールで，残響時間目標値1.6秒とした。中ホールは市民の郷土演劇を主としたホールで，残響時間目標値を

1.5秒とし，ともに音楽的な評価を得ている。

構造計画

ブロック計画　全体計画としては，架構性状を考慮して，1.ホワイエ，2.大ホール，3.中ホール・中央公民館の3ブロックの単純な構造体に大別して，各ブロックはエキスパンションジョイントで結合した。

架構計画　平面計画の自由性と経済性を考えて耐力壁を一部含んだラーメン架構とした。大ホールは機能上大スパンで，遮音性能上，屋根荷重が通常の場合より大きいので，屋根架構はたわみ剛性が大きく，経済的なH型鋼の平行弦トラスを採用した。

基礎計画　現地盤面下5～10mの砂質石灰岩を支持地盤とする既製ＰＣ抗基礎とした。

塩害対策　細骨材中の塩分量を0.02%以下にするため，砕砂50%と除塩した海砂50%による混合砂を使用した。また，外部に面する部位のコンクリートのかぶり厚は50mm以上としている。

設備計画

各設備は，施設に即したもので，かつ簡易に運営できるもので省エネルギーを志向している。

電気設備　高電圧配電式による電力損失の減少，コンデンサーの分散設置による無効電力の減少，合理的な照明計画を行なうとともに，昼光，使用頻度および管理を考慮し点滅回路を分割している。

給排水衛生設備　揚水ポンプ揚程の低減および，地形を有効利用した重力式排水方式により所要動力を極力少なくしている。

冷房・換気設備　庇，外部ルーバーの設置，屋根，外壁，窓等の各部位の断熱性を高めて熱負荷の減少を図った。冷房・換気システムは各施設の特異な使用状況に対応できるように考慮している。大ホールには灯油焚冷水発生機と空調器，全熱交換器の組合せ，また中ホールと中央公民館は水冷式パッケージ型

空調器方式として，各室用途に応じて細かくゾーニングしてランニングコストの低減を図っている。

植栽計画

沖縄の風土と地域にマッチした植栽計画とし，敷地外周にはフクギ，前庭および建物の回りにはガジュマル，ホウオウボク，クロトン，ツユクサを配置して公園とのつながりを考慮した。

コンペ時審査評　S52.6.16

選定の理由

優秀作品　（竹中工務九州支店一級建築士事務所）　＝沖縄市の市民会館としての独自性を，いわゆる情緒に，注さない限界の中で発揮すると同時に，特別集会施設，コミュニティーセンター，中央公民館の三部門を非常に素直な形で併列して各機能の明快な分割を図るとともに，背部の直交する動線によってその連絡を企図するなど，伝統と現代生活との統合に成功していると考えられる。さらに音に関しても，航空機，高速道路駐車場からの騒音遮断及び文化施設の立地より，計画道路にその正面を向けていることも共感できる。

ただ，そのために高速道路の通過からの展望のさびしさや，公園との関連性のうすさが惜まれる。審査委員，安東勝男，野原康輝，嘉手納是敏，砂川正男，幸地光英，敬称略。

（建築業協会賞）評 S57.6.21

BCS賞

この施設の建つ沖縄市は，沖縄本島中部圏の中心都市で，那覇市に次く県第２の都市である。昭和49年４月１日に旧コザ市と美里村とが合併して生れた。

「国際文化観光都市」を目指して昭和50年に沖縄市総合計画基本構想を策定しているが，それの一環として広域的な文化施設，市民会館を企画，昭和52年

3月に全国公開の設計競技を行った。当市民会館の設計は，その際最優秀案として入選決定したものである。

沖縄は本来，独自の個性ある文化をもっている。沖縄古来の建築には特に，それを構成する素材や，そのディテール，形態に，あるいは平面計画そのものにその文化を見ることができる。

しかし，太平洋戦争の激戦地となり，焼土と化した沖縄は，戦後米軍の占領下の時代，進駐時代を通して街は復興されたが，いわゆるアメリカナイズされた近代的な建築によって，その大半が占められるようになってしまった。

その後，沖縄が日本に返還されて以来今日まで，県民はその独自の文化を育て新しい国際化社会の時代に対応すべく街づくりにも大変な努力を払っている。しかし，沖縄に建つ戦後の建築で，本当に沖縄の文化に根ざして建てられると考えられるものは未だはなはだ数が少ないのが実情である。この市民会館の設計には，その点への配慮が強く感ぜられる数少ない建築の一つであるといえる。

施設内容は，1553人を収容する特別集会施設。500人を収容するコミュニティセンター，それに公民館という3つの施設の複合建築で，延 8,463㎡の規模のものである。これら機能の異なる3つの施設を雁行並列に配置し，施設利用者は夫々の施設に独立したレベルの異なる入口から入れるのに対し，土地の起伏を巧みに利用し，特別集会の大ホール，コミュニティセンターの中ホールの各舞台と楽屋は同一平面で直結すると共に，管理部門も背後で三施設に共通に結ばれるよう計画されている。平面計画，断面計画が合理的から有機的に関連づけられ，利用者と管理サービス機能が単純明解な動線で巧みに解決されている。

また，南国独特の暑い日差しに対し，南面各施設入口には深い庇を設けたり，東西の開口部には伝統的な凧の骨状のイメージをもつＰＣ版構造格子ルーバーをデザインするなど，きびしい気候風土に対応した工夫がそのまま建築のデザインに生かされている。

屋根コンクリートスラブ上のU型PC版は航空機騒音に対するとともに台風などの豪雨に対しても十分な機能を果すディテールの工夫がなされている。その屋根上上には，沖縄独特の風物詩ともいえるシーザーを配し，安らぎのある建築空間の演出も，一応その成果をみることができる。建築を構成する主材はコンクリートの打放しで，その上にカラークリヤー仕上として全体に格調のある押えたデザインにしてあるが，施工もそれに対応して，各種繰型の型枠精度も確保され建物の風格を一層引き立てている。

太平洋戦争で日本における唯一最大の激戦地となってまだ半世紀も経ていない今日，地元の方々の当施設への並々ならぬ熱意と努力とによって実現したこの会館は，以上述べた通り沖縄の風土文化をよく踏まえた上に近代的技術を周到に用いた設計であり，その意図を十分体した立派な施工が行われた建築である。この施設が今後ますます市民の方々の文化活動の拠点として育っていくことを祈って止まない。　　選者：大谷幸夫　池田武邦　木島努　敬称略

以上，設計基本方針と第3者の審査評との共感性，連続性をこの2つのプロジェクトの具体例より理解いただければ幸である。

※　用語とその造型についての一考察については，“実践的デザインボキャブリーについて”を参照されたい。（関西意匠学会会報第18号・S51.6.15）